

第6章 ヒロシマ・ナガサキ

岡本 三夫

1 <ヒロシマ> というとき

栗原貞子

「ヒロシマ」というとき」

「ヒロシマ」というとき

「ああヒロシマ」と

やさしく答えてくれるだろうか

「ヒロシマ」といえば「パール・ハーバー」

「ヒロシマ」といえば「南京虐殺」

「ヒロシマ」といえば女や子供を

壊^{こわ}の中にとじこめ

ガソリンをかけて焼いたマニラの火刑

血の炎のこだまが返ってくるのだ

「ヒロシマ」といえば

「ああヒロシマ」とやさしくは返つてこない

アジアの国々の死者たちや無告の民が
いっせいに犯されたものの怒りを
噴き出すのだ

〈ヒロシマ〉といえば

〈ああヒロシマ〉と

やさしく返つてくるためには

捨てた筈の武器をほんとうに

捨てねばならない

異国の基地を撤去せねばならない

その日までヒロシマは

残酷と不信のにがい都市だ

私たちは潜在する放射能に灼れるパリアだ

〈ヒロシマ〉といえば

〈ああヒロシマ〉と

やさしく答が返つてくるためには

わたしたちは

わたしたちの汚れた手を

きよめなければならぬ

この詩はヒロシマ・ナガサキへの原爆投下を正当化しようとして身構えていた人たちの閉ざされた心をやさしく開いてくれる。対決ムードが雲散霧消する。平和を願う詩人の真摯な気持が滲み出しているからであり、アジアにおいて日本軍が犯した戦争中の罪を率直に認め、ヒロシマの悲劇が共有されるためには日本人は何をしなければならないかがうたわれているからである。作者の栗原貞子は次のように解説している。

この詩は、日本の戦争責任を反省し、戦争放棄の憲法を実行し、核廃絶、軍備の完全撤廃をする以外に世界の人々の友好連帯を得ることはできないということをうたつた詩です。しかし、日本国民が戦争責任を自覚するためには、戦争の最高責任者であつた天皇の戦争責任が明らかにされねばなりません。天皇の名のもとに行われた戦争であるにもかかわらず天皇の戦争責任を隠したり、あいまいにすることは、軍閥、財閥、戦争指導者をはじめ国民一人一人の戦争責任を隠したりあいまいにすることになります。

（栗原貞子『問われるヒロシマ』三一書房、一九九二年）

しかし、天皇を含む日本人一人ひとりに戦争責任を喚起させるだけがこの詩のメッセージではあるまい。この詩の深い意図には日本人の戦争責任と同時に原爆に対する厳しい告発がある。そうでなければ、この詩はそもそも生まれなかつただろう。原爆は日本軍が犯した戦争犯罪に対する天罰だつたという転倒した俗説がある。この詩は逆のことをいつている。原爆は告発されなければならない、と。

半世紀以上も前のことなのに、第二次世界大戦の最後の一〇日間に強行されたヒロシマ・ナガサキへの原爆投下を多くの人びとは忘れていない。東京、大阪、横浜、名古屋など、約七〇都市を空

襲で焼尽したうえに、敗戦を認める和平工作で右往左往していた日本に市民皆殺しの原爆を落とした罪は米国人の良心に突き刺さつたままである。ヒロシマ・ナガサキへ謝罪の巡礼にやってくる米国人はもちろんいる。だが、多くの米国人は良心の呵責^{かしゃく}を逃れるために、逆に「真珠湾を忘れるな！」(Remember Pearl Harbor) を反射的に繰り返す。^{*1}

日本人は「ノーモア・ヒロシマ・ナガサキ！」と言う。「ヒロシマ・ナガサキを忘れるな！」とは呼ばない。広島と長崎の市民にそういう気持が特に強いことはいうまでもない。ヒロシマ・ナガサキの悲劇は二度とあつてはならないことなのである。戦争直後に広島を訪れたフランス人ジャーナリストのロベール・ギランは次のように書いている。

私は驚きと当惑と羞恥で言葉がなかつた……私は呟いた。「西洋が恥ずかしい」、「科学が恥ずかしい」、「人類が恥ずかしい」。^{*2}

こうした感受性は、ギランが米国人でなくフランス人だったからもてたのだろうか。もちろん、そうではなかろう。人間としての普通の感性と想像力があるならば、ヒロシマ・ナガサキは国籍、人種、民族のいかんを問わず、類似の感慨を人ひとの心に喚起するだろう。ヒロシマ・ナガサキへ謝罪にやつてくる米国人にも同じ感性がある。

他方、ヒロシマ・ナガサキという人類史的体験が風化しつつあるのも事実である。ヒロシマ・ナガサキという地名は東京・大阪とならんで世界的に有名だが、「巨大な爆弾が落ちた都市」くらいにしか思つてない人も多い。被爆地の広島大学でさえ「八月六日」が何の日か知らない学生が七割

*1 ジの「リメンバーア方式」による米国の得意芸について伊藤千尋『反米大陸——中南米がアメリカにつきつけるNO!』(集英社新書、二〇〇七年) を参考照。

*2 次の書物からの引用。
Udall, Stewart L., *The Myths of August*, Pantheon Books, 1994.

もいるというのだから、当然かもしれない。^{*3}しかし、過去を忘ることは過ちを繰り返すことにつながる（ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世）。あの日の悲劇に至る過程には一体何があったのか、私たちはしつかりと記憶にとどめておかなければならぬ。

2 発端——マンハッタン計画

一九四二年、米国はマンハッタン計画という暗号名の原爆製造計画に踏み切り、総監督にレスリー・グローブス少将を、理論的最高指導者にカリフォルニア大学教授ロバート・オッペンハイマー博士を任命した。マンハッタン計画の中心地となつたニューメキシコ州ロスアラモスという灌木の多い山地には、米国内はもとより、世界中からノーベル賞クラスの科学者が集められ、荒野の寒村は日ならずして十数万人の秘密研究都市に変貌した。

ヨーロッパではドイツの独裁者アドルフ・ヒトラーが周辺諸国を侵略し、徹底した人種差別政策を行つていた。核兵器の原理である核分裂を最初に発見したのは原子科学の先進国ドイツだったから、ヒトラーが最初に原爆を製造する可能性はあつた。米国は一九四二年、科学者たちの提言を受け入れて、マンハッタン計画にとりかかつた。ドイツに先を越されではならないという脅迫感を抱いた一部の亡命科学者たちを代表する形でローズベルト大統領に原爆製造計画を勧める親書を送つたのはアインシュタイン博士だつた。

米国の諜報機関はまもなくナチスドイツにはそのような能力も具体的な計画もないことを知つた。だが、ひとたび開始されたマンハッタン計画にストップはからなかつた。そしてドイツの敗色が

*3 小林文男広島大学教授（当時）の第一回全国平和教育シンポジウムでの研究報告による。『中国新聞』一九九一年六月二十四日参照。

濃くなつた一九四四年、米英首脳は日本に對して原爆を使用することを決定した。

マンハッタン計画に參加していた科学者のなかには奇襲攻撃で日本の都市に原爆を投下することに反対して大統領に親書を送つたジェームズ・フランクのような人もいた。戦後になつて公表された「フランク報告」は、原爆の軍事的使用が諸国の中に対する不信感をつのらせ、原子科学が普遍的である以上、米国の原爆独占は長続きせず、必ず核軍拡競争が始まるることを予言し、警告していた。

一九四五年五月八日、ドイツは降伏した。その約二カ月後の七月一六日未明、米国はニューメキシコ州アラモゴードの砂漠地帯で人類初の原爆実験に成功し、三週間後の八月六日には広島に、九日には長崎に原爆を投下した。

八月八日、ソ連が対日戦を布告し、第二次世界大戦最後の一週間が始まつた。そして八月一〇日、戦後における天皇制存続保証（＝國体護持）の感触が得られたのを契機に終戦工作が一挙に進んだ。数日間にポツダム宣言受諾の方針が決定され、八月一五日に戦争は終わつた。

3 原爆投下

一九四五年八月六日午前七時九分、米軍機襲来のサイレンが鳴り響き、一機の米軍機ボーイングB-29が一万メートルの高度で広島上空に侵入してきた。市民は一斉に避難したが、二三分後の七時三一分には空襲警報は解除になつた。敵機はすでに広島上空から姿を消し、太平洋上にあつた。防空壕へ避難していた人びとは地上に出てきて、戦時下の平凡な一日が始まつた。戦争中でも昼も

夜も一日中緊張して生活していたわけではなかつた。警戒警報や空襲警報がないときには、大人は仕事に励み、子どもは勉強をしたり、鳥追いや魚釣り、あるいは面子、ビー玉、挟み将棋などをして遊んでいた。

八時一五分、ピカッという閃光が走り、轟音が響きわたつた。

空襲警報は鳴らなかつた。理由は不明である。朝だつたから、街角は通勤中の歩行者や自転車に乗つた人であふれ、路面電車は走行中、店が開き、会社や役所が始まり、工場の機械が動き始めた頃だつた。八月は夏休みの時期だつたが、この頃になると夏休み返上で登校する地域も多く、広島の学校の校庭では朝礼の最中だつた。空襲警報が解除されてそれほど時間がたつていなかつたため、人びとは油断しきつていた。原爆投下のタイミングはこの緊張感の空白をねらつたとしか思えないのである。

無警告、無防備、無抵抗、無差別と、都市を対象とした原爆実験の条件はほとんど完璧だつた。原爆搭載機「エノラゲイ」号ボーイングB-2九は九六〇〇メートルの高度で広島上空に襲来し、落下傘つきの爆弾を投下した。何が落ちてくるのだろうと、ぼんやり空を見上げていた人たちさえいた。閃光が走り、轟音が響いたのはその時だつた。原爆の放出する宇宙的暴力エネルギーの破壊力と殺傷力は最高値に達し、実験は成功した。「エノラゲイ」に随行したもう一機のB-2九が空からの光景を撮影し、克明に記録をとつた。先に侵入し、退去した同型の飛行機は偵察機だつたのか、それとも条件を整えるためのおとりだつたのか、真相は不明である。

4 被害の実相と被爆者への差別

原爆は市の中心部の上空五八〇メートルで爆発した。ウラン一三三五が使用され、爆発した一キログラムのウランから発生したエネルギーは、TNT火薬一五七一〇キロトン相当だったと推定されている。当時、世界最大のB-29爆撃機が三千機～四千機で一挙に広島に爆弾を落とした——技術的・物理的には不可能——計算である。

原爆投下の瞬間、爆風は爆心地では秒速四四〇メートル、爆発点は摂氏数百万度の温度となり、直径約二八〇メートルの火球が発生、数十万気圧という超高压状態が生じた。巨大な台風でも瞬間風速六〇メートルを超えるものではなく、鉄の溶ける温度は摂氏一千度だから、原爆の数値は常識を超えた破壊力のすさまじさを示す。くわえて、莫大な量の放射線が放出されて、市民を襲つた。爆発直後の初期放射線であるガンマ線と中性子線が市を覆い、四グレイ(三〇ラド)以上の全身照射を受けた人の多くが死亡した。かろうじて生き残った被爆者にも放射線による後障害が現れ、その後死亡したり、六〇数年後の現在でも原爆症の魔手に苦しんでいる人が少なくない。また、直接被爆しなくとも、救援に駆けつけた人びとが残留放射線に曝され、「入市被爆者」となった。彼ら・彼らも原爆病を発症した。

被爆後五、六年して、白血病患者が急増した。潜伏期間後の後障害の発生だった。後障害の特徴的なものは、皮膚の創傷や火傷のあとが隆起するケロイドのほか、白内障・白血病・甲状腺癌・乳癌・肺癌などを中心とする諸種の癌、胎内被爆者に生じた知的障害、発育不全をともなう小頭症など

どだった。

犠牲者のほとんどは非戦闘員で、兵士の数は約三万人だった。（日本軍の真珠湾攻撃で死んだ米兵は二四〇〇人、文字通り巻き添えになつて死んだ市民の数は六八人だった）。^{*4} ヒロシマ・ナガサキでは戦争に行かない壮年や老年の男性もいたが、割合からいえば女性や子どもが多かった。

ヒロシマ・ナガサキの犠牲者の大半は瞬時に、あるいはしばしのあいだの放射能との闘いの後に、死没したが、死を免れた人たちの多くと、原爆投下の日に胎内にあった人たちは、何年もの間、いや何十年もの長い年月にわたつて被爆者としての人生を余儀なくされた。得体の知れない病気の発症に恐れおののき、病気の治療に腐心し、日夜不自由な身体に苦しみ、肩身の狭い思いをし、痛めつけられ、差別されてきた被爆者たちの歳月は、健常者の想像を絶する。特に、帰国した韓国人・朝鮮人を中心とする外国人被爆者は、長い間、特別医療措置の対象外とされ、原爆後遺症と周囲の無理解で苦しむ一生を余儀なくされた。小頭症の子を抱えた親をはじめ、身内に被爆者がいる人たちの苦労も看過できない。社会は彼女ら・彼らに冷たく、肩身の狭い思いをさせ、痛めつけ、差別した。かつて、「肺病たかり」といつて結核患者とその家族を避け、「癩病」と呼んでハンセン病患者とその家族を毛嫌いした健常者たちは、ヒロシマ・ナガサキ以後は忌避と差別の矛先を被爆者に向け、就職や結婚に際しても、差別した。

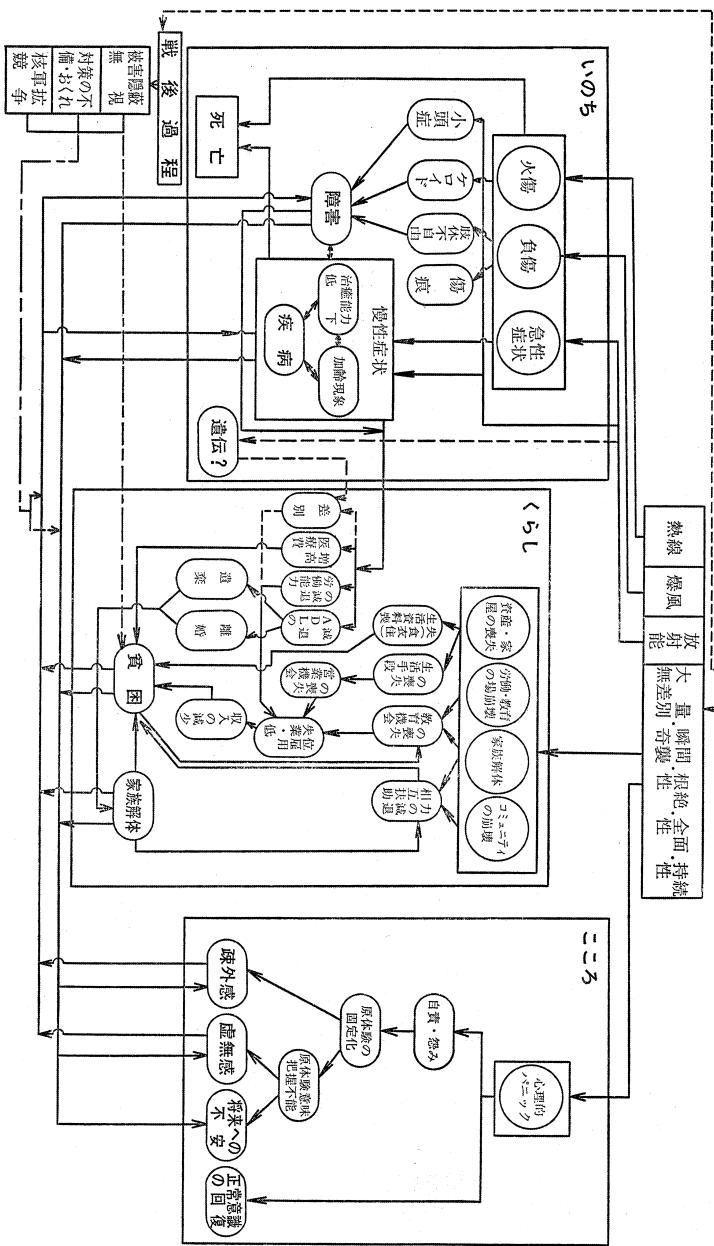
ヒロシマ・ナガサキにおいて明らかになつた原爆被害は、①瞬間奇襲性、②無差別性、③根絶性、④全面性、⑤持続拡大性という五つの点において前代未聞の特徴を兼ね備えていた。これらの原爆被害の特徴の全体像は図6-1のようになる。

①の瞬間奇襲性と②の無差別性についてはすでに述べたが、③の根絶性というのは原爆が個人、

*4 Gwynne Dyer, *War*, Crown Pub. Inc., 1985.

図 6-1

原爆投下



出所：朝日イブニングニュース社「被爆の実相と被爆者の実情—1977 NGO 被爆問題シンポジアム報告書」。

家族、隣り近所、町内、地域を地上から抹殺してしまうことを意味する。六〇年以上過ぎた現在でも広島の平和公園にある供養塔には約七万の無縫仏が眠つており、名前はわかついても引き取り手のない遺骨は二〇〇九年三月末現在で約八万三千人分（二〇〇八年未現在で八二四人分、一九九九年現在では八五一人分だった）。家族丸ごと、隣近所全体が皆殺しになつてしまつたため、死者を供養するはずの親近者までが犠牲になつたからであり、彼女ら・彼らを思い出す親族さえいないという状況なのだ。

④の全面性というのは図6-1に示した被爆者の「いのち」、「くらし」、「こころ」のあらゆる領域においてみられる苦難が相乗効果的に彼女ら・彼らを襲い、人間性を破壊することを意味する。生き残った被爆者のなかには家族ばかりでなく、友達や職場の同僚を失いながら自分が生きていることに罪悪感をもつてゐる者もいる。被爆者の心理を研究したロバート・リフトンは彼女ら・彼らの日常生活を「生き地獄」と呼んだ。

⑤持続拡大性というのは放射線による被害が原爆投下時の急性障害にくわえて晩発障害（後障害）によって被爆者を苦しめ、身体的・心理的苦痛が被爆時よりもいつそう拡大し続けることを意味する。動物実験では放射線による遺伝子の損傷も観察されているから、被爆者の心理的負担は大きい。「ヒバクシャ」と片仮名で表記するようになつたのは、核実験や原発事故などが原因でヒロシマ・ナガサキ以外にも放射能汚染による傷害が広がつてゐるからであり、ヒバクシャたちの苦しみはいつ終わるかわからない。

広島では約三五万人が被災し、一九四五年一二月末までに約一四万人（誤差一万人）が死んだ。全焼・全壊した家屋五万數千（全戸数の約七〇%）、市役所、県庁、警察、消防署、新聞社、放送局、

病院、保健所、郵便局、銀行、学校などが一瞬にして消えた。いや、市そのものがなくなつたのだ。約四〇万人が住んでいた広島はただの焼け野原に変わり果てた。死んだのは人間だけではなかつた。ウシ、ウマ、ブタ、ニワトリなどの家畜や家禽、イヌ、ネコなどのペット、カラス、ハト、ツバメ、スズメ、セキレイなどの身近な野鳥も死んだ。トンボやチヨウチヨウも死んだ。市内を流れる川は人間や動物の死体と魚や鳥の死骸で一杯になつた。全市は文字通り阿鼻叫喚あびきょうかんの地獄だつた。一家全滅世帯が数多く発生し、地域社会も消滅した。さらに、戦前・戦中の記録も灰燼に帰し、被爆直後の調査もできず、正確な死亡者数は、現在でも不明である。

また、死亡者の中には当時日本の統治下にあつた国・地域の人びとも多く、数万人の在日韓国人・朝鮮人を筆頭に、中国人、留学生、米英軍捕虜など、外国人被爆者は二十数カ国に及んだ。日米開戦直前に緊急避難的に戻つてきていた多数の日系米国人ないし米国定住の日本人も被爆した。

5 「第五福竜丸」事件

一九五四年、南太平洋のビキニ環礁における米国の水爆実験で、静岡県焼津港から出航していた日本のマグロ漁船「第五福竜丸」が、米軍当局が警告していた危険水域外で操業していたにもかかわらず、放射性沈降物（いわゆる「死の灰」）を甲板いっぱいに浴びるという大事件が発生し、乗組員二三名（当時一八～三九歳）が被曝した。無線長の久保山愛吉さんは半年後に死亡した。水爆の爆発力と風向きを米軍が読み誤ったための災難だつた。高知県などから操業に来ていた他のマグロ漁船相当数も被曝していたことが後の調査で判明した。水爆実験の破壊力は広島型原爆の七五〇倍か

ら一〇〇〇倍に達し、米軍の予想を大きく上回った。日本では放射能汚染マグロでパニックが起り、国民が魚食を避けたため、休業に追い込まれる寿司屋や魚屋が続出した。

この事件を契機に、杉並区の主婦たちの運動を皮切りにして原水爆禁止運動が全国的に盛り上がり、翌五五年八月六日には広島で初めて原水爆禁止世界大会が開催された。原爆投下後、すでに一〇年が経過していたため、史上最も残酷な非人間的兵器の使用に対する人びとの関心はすでに激減していた。しかし、「第五福竜丸」事件は核兵器禁止へ向けての歴史的な一步を踏み出す大きな契機となつた。

原水爆禁止運動が世界的に広がるなかで、核実験、原発事故、その他の放射能汚染のために、世界各地に被曝者がいることが知られるようになり、平時にも猛威をふるう核の暴力と人権侵害が明らかになつてきた。ヒロシマ・ナガサキの悲劇だけでは終わらなかつた。米占領軍はあらゆる手段を駆使して原爆の非人道性を覆い隠し、国際的非難をかわすことに成功していたから、ビキニの悲劇がなかつたならば、原水爆禁止運動はさらに長い年月後に開始されたかもしれない。ここに第五福竜丸事件の歴史的意義がある。

6 増大するヒバクシャ——ビキニからチャルノブイリへ

ヒバクシャの発生は一九世紀末にさかのぼる。最初の犠牲者はチエコスロバキアのウラン採掘労働者たちだつた。また、キュリー夫人をはじめとする科学者たちのなかにも放射性物質であるラジウムの被曝によるガン発生で犠牲になつた人たちもいた。前世紀中頃までは、ラジウム蛍光時計の

生産に従事した労働者のなかにもガンで死んだ人たちが多かつた。

一九四〇年代になると、ウランの需要が増し、それにともなつてヒバクシャの数も増大した。ベルギー領コンゴ、カナダのグレートベアレイク、ナバホ、サスカチワンなどのウラン鉱山労働者、マンハッタン計画という暗号名で呼ばれた核兵器の極秘生産計画に従事した労働者などがそうである。米国各地で仕事の性質について何も知らないまま結果的にはマンハッタン計画に従事した労働者の相当数が放射能汚染によつてガン患者となり、病因を知らされないまま死んでいった。

一九四五五年八月六日と八月九日のヒロシマ・ナガサキへの原爆投下でヒバクシャ数は激増した。ヒロシマ・ナガサキの犠牲者数はいまなお正確にはわからない。マサチューセツ工科大学のジョン・ダワー博士によると、「一九四六年六月に発表された米戦略爆撃調査団の「広島で七万人から八万人、長崎で三万五千人から四万人」という低い犠牲者数がその後の推定値の基礎数になつてしまつたが、それ以後に死んだ人たちを加算するならば、ヒロシマ・ナガサキの大量殺戮^{ホロコースト}よつて死んだ人びとの数はその三倍（約三三万人）に達するだろうと推定している。^{*5}

ヒロシマ・ナガサキ、そしてビキニのヒバクシャだけでなく、核実験や原発事故、さらにはウランの採掘、運搬、濃縮、核兵器製造などの過程で、あるいは原発稼動にともなう一連の作業で被曝した人びとが世界には一、四〇〇万人から一六〇〇万人はおり、米国における胎児の死亡、流産、死産の総数は二一三〇〇万件に達するという報告もある。^{*6}

報告はスリーマイルアイランド原発事故（一九七九年）以後の出版だが、 Chernobyl 原発事故（一九八六年）以前の出版である。世界にこれほど多くのヒバクシャがいる以上、もはや「唯一の被爆国日本」という表現は正確ではない。なるほど、今も日本は核兵器による攻撃の標的にされ

*5 John Dower, "The Bombed. Hiroshima and Nagasaki in Japanese Memory" in *Diplomatic History*, Vol. 19, No. 2, Spring 1995.

*6 Rosalie Bertell, No

Immediate Danger, 1985.

*7 Ernest Sternglass, *Secret Fallout*, 1981.

たという意味では「唯一の被爆国」である。しかし、もはや「唯一のヒバク国」ではない。

その後、英國のセラフィールド（旧名ワインスケール）、米国各地の核兵器工場一帯（ハンフォーム、オーフリッジ、ロッキーフラッシュ、サバンナリバーほか）、ネバダ核実験場風下地域（特にユタ州）、カナダやアリゾナ州ほかのウラン鉱採掘現場、マーシャル諸島、モルロア環礁、オーストラリアのマラリンガ核実験場、アルジェリア領サハラ砂漠等での核実験、旧ソ連のセミパラチンスクなどでの核汚染が報道されるようになり、本も出版されるようになった。

米国内でもあまり知られてないが、スリーマイルアイランド原発事故でも動物と人間の死産や動植物の奇形化が報告されている。^{*8}

核兵器事故による被害も予想以上に多い。核兵器事故の報道は、軍の機密性とからむため報道されることのが少なく、特に旧ソ連では極秘だった。ある調査によれば、一九四五年から一九八九年までの核兵器事故は米軍で一七八回、ソ連軍で二七回、英軍で一九回も発生している。^{*9}

調査から数えてすでに約二〇年になるが、米国のそれに比べ旧ソ連での核兵器事故数は余りにも少なく、グラスノスチ以前に発生した事故の真実はすでに歴史の暗闇に消えてしまつた可能性が高い。フランスと中国のデータは機密性の壁に阻まれて取得できなかつたという。こうした事実を考慮に入れるならば、核兵器事故の実数は当該調査結果をかなり上回るものと推定することができる。

また、世界のヒバクシャ数もチャエルノブリ原発事故以後さらに増大したことは確実であり、その総数は少なめに見積もつても三三〇〇万人に達するという研究が報告されている。^{*10}

ノーベル平和賞受賞者のノエル・ベーカー卿は、一九七七年に広島で開かれた原水爆禁止運動世界大会の席上で「私たちはすべてヒバクシャです」と言った。それは象徴的に受け止められた。し

*8 Harvey Wasserman & Norman Solomon, *Killing Our Own: The Disaster of America's Experience with Atomic Radiation*, Dell Pub. Co., 1982.

*9 Shaun Gregory, *The Hidden Cost of Deterrence: Nuclear Weapons Accidents*, Elsevier, 1990.

*10 Permanent People's Tribunal, *Chernobyl Environmental, Health and Human Rights Implications*, 1997.

かし、この老碩学はすでにスリーマイルアイランド原発事故や Chernobyl 原発事故によつて代表される人類の被曝を看破していたのである。

7 部分的核実験禁止条約（P T B T）締結の背景

冷戦たけなわの一九六三年、米英ソ三国は部分的核実験禁止条約（P T B T）に調印した。それまで無制限だった核実験に制限を加える条約で、大気圏、宇宙空間、水中での核実験が禁止され、米英ソが調印した。米国がマーシャル諸島のビキニ環礁で世界初の水爆実験を実施した一九五四年三月から数えてほぼ一〇年の歳月が経過していた。ビキニ水爆実験がもたらした環境の放射能汚染の深刻さを訴える科学者たちの警告が国際政治を動かした例である。

ビキニ水爆実験当時、米国が予想し、警告した危険水域内で実際に何が起つたかは知る由もない。実験に参加した米兵の多くが被曝し、退役被爆軍人として米政府を相手取った集団訴訟問題にまで発展したことは広く知られている。マーシャル諸島の住民の中には危険水域内にいた人もあつた。危険水域外にいた第五福竜丸をはじめとするマグロ漁船の放射線被曝については前述した。^{*11}

こうした大事故にもかかわらず、大気圏内、つまり地上や海上での核実験は頻繁に行われ、部分的核実験禁止条約が締結されるまで続いた。その回数が最も多かった一九六二年には米ソ両国の核実験は計一七八回に及んだ。毎月一五回、二日に一回の割合で核実験を行うという異常さだった。

この間に、大気圏内に放出された放射性物質の量はおびただしく、そのなかにはプルトニウム、ストロンチウム九〇、セシウム一二七などのように半減期の長い核種もあるわけだから、地球環境へ

* 11 高橋博子「封印されたヒロシマ・ナガサキ」（凱風社、二〇〇八年）参考照。

* 12 *The Bulletin of the Atomic Scientists*, November / December 1998.

の破壊的影響は大きかった。実際、米国をはじめ世界中の乳児の歯からストロンチウムが検出されている。^{*13} 一九五一年から一九六三年までに生まれた地球上のすべての人びとが特にそうだろうが、それ以外の人間にも少なからぬ健康上の影響を与えたことは間違いない。

大気圏内における核実験を禁止する部分的核実験禁止条約が生まれた背景には、以上のような事情があった。この条約が政治的軍事的理由によつてよりも、むしろ地球環境、人間の健康、生態系への配慮によつて締結されたという事実（同条約前文）の意味は注意しておく必要がある。

ところは、およそ三〇年後に国際司法裁判所が核兵器の使用と威嚇の違法性について審議するよう世界保健機構（WHO）と国連総会の両者から要請された際に、あくまでも国連総会の決議に対する回答という形式に拘泥し、WHOからの要請を「管掌事項にあらず」として門前払いしたことの不當性が透明になるからである。史上初めて核兵器の使用と威嚇を「一般的には国際人道法に違反する」という画期的な判断を下した国際司法裁判所の勧告的意見には一定の評価を与える」とができるが、部分的核実験禁止条約締結の背景についての無知を暴露し、環境問題への配慮を怠つたことは否めない。

8 ヒバクシャの世界化——核と人権

クリントン大統領が序文を寄せている『放射能人体実験——大統領諮問委員会最終報告^{*14}』という六〇〇頁を超える調査報告書は、ナチス医師団や日本帝国陸軍の七三一部隊同様、人間の尊厳を踏みにじった国家的犯罪の率直な自己批判の記録であり、犯罪自体は厳しく糾弾されなければならな

* 13 International Physicians for the Prevention of Nuclear War, *Abolition 2000. Handbook for a World Without Nuclear Weapons*, Physicians' Edition, 1995, IPPNW.

* 14 Final Report of the President's Advisory Committee, *The Human Radiation Experiments*, Oxford University Press, 1996.

いが、國家権力の恥部を公刊させるに至った運動は、米国における草の根民主主義の底力を示す里程碑として注目される。

調査の引金となつたのは、一九九三年一一月に『アルバカーキ・トリビューン』紙に掲載されたアイリーン・ウェルサム記者の「プルトニウム人体実験」という国家告発の連載記事だつた。彼女の連載記事は一九九四年度のピューリツツァー賞に輝いた。

原爆製造開始直後の一九四二年から一九七〇年中頃まで三〇年以上にわたつて実施された放射能人体実験のデータは、専門的医学研究誌に掲載された数字を中心とする学術論文としては知られていた。しかし、生身の人間にプルトニウムを注入した人体実験の生々しい報告を一般の米国人が読んだのはこの連載記事が初めてだつた。

さらに、この連載は米市民六九五人を別の放射能人体実験に付したことを見明らかにした七年前の議会報告に光をあてた。E・マーキー下院議員を委員長とする小委員会がまとめた「米市民に対する放射能人体実験三〇年の軌跡」という議会報告がそれである（一九八六年）。しかし、当時は冷戦イデオロギー、マスコミの思惑、当事者の遠慮などが重なり、国民的関心事とはならなかつた。

冷戦時代の遠慮がなくなると、復活したのは「マーキー報告」だけではなかつた。ヴァンダービルト大学での約八〇〇人の妊婦に対する放射能実験、国立オークリジ研究所におけるガン患者約二〇〇人の放射能全身被曝実験、オレゴン州とワシントン州での囚人一〇〇人以上の睾丸被曝実験、知恵遅れの少年たち一九人に放射性物質を飲ませたマサチューセッツ州での「栄養学実験」等々が、次々に暴露された。

一九五〇年代、米国は核戦争への具体的準備を開始した。行政機関や軍司令部の地下建設計画が

進行し、核攻撃に備えるための民間の核シェルター建設ラッシュが起きた。医学的には核戦争で放射能を浴びた兵士や一般市民の治療のためのデータ収集が行われた。データ収集は第二次世界大戦終結まではマンハッタン計画の一部として行われ、戦後は原子力委員会によって継続されたが、やがて国防総省やエネルギー省も関与することになった。

そもそも、マンハッタン計画には当初からスタッフオード・ウォレン医学博士を班長とする医学研究班が存在した。マンハッタン計画の実態は極秘だったから、労働者のなかに放射能が原因と目される健康障害が発生しても、病気の真因が本人に知らされることはなかった。むしろ、動物実験によるデータ収集の限界を超えるためには人体実験が必要だと考えられていたため、放射能障害による患者は貴重な存在として重宝された。

しかし、事故その他のによる病人の発生は予測不可能であり、少数だったから、研究者たちは偶発的なデータ収集では飽きたらず、計画的放射能人体実験の必要性を感じていた。一九四四年、スタッフオード・ウォレン博士指揮の下、ポロニウム、プルトニウム、ウラニウム等の核物質を被験者の体内に注入する実験が開始された。マンハッタン計画の科学部門最高責任者ロバート・オッペンハイマー博士の了解もあつたといわれる。被験者には重病人、服役囚が動員されたが、健常者も含まれた。インフォームド・コンセントはなかった。

しかし、必要とされたのは被験者の体内放射能の測定だけではなかつた。核戦争では兵士も一般市民も核汚染のなかで生活することになる。かくて、環境や建物における放射能の測定も必要とされ、テネシー州、ユタ州、ニューメキシコ州では牧草のアルファルファに放射性ナトリウム同位体を散布したり、建物内に放射性物質を撒き散らしたりして、被爆を計量する秘密の実験が頻繁に行

われた。

実験を推進した原子力委員会は、一九五一年当時、六万人の研究者と労働者を擁し、その敷地は四五〇〇平方キロ（ロードアイランド州とデラウェア州をあわせた広さ）に達した。米国各地の研究所に加え、その活動は「ベルギー領コンゴーとカナダ領北極地帯のウラン鉱山から太平洋の核実験場と日本に投下された原爆の医学的追跡調査にまで及んだ」という。広島市と長崎市にできた原爆傷害調査委員（ABC）の目的は実は米ソ核戦争で発生する被害対策が主な目的だった。

しかし、米ソ冷戦の終結と共にこうした政治文化はほころびを見せ始めた。核時代の愚劣な異常さが白日の下に曝され、雲の上の安全保障ではなく、「人間の顔をした安全保障」を要求する国際世論は日ごとに大きな声として広がりつつある。ヒロシマ・ナガサキを再認識することは、六〇年以上にわたって歴史の進歩を妨害してきた核時代にピリオドを打つための基本的作業なのである。